

1960年代のミニ開発住宅地におけるコミュニケーションに関する研究 —その1 既往文献から—

日大生産工(院) ○杉浦 稔
日大生産工 曾根陽子

1 はじめに

本研究は、「ミニ開発住宅地」の一つである埼玉県川口市S地区に関する継続研究であり、開発と現状及びコミュニケーションについて既往文献からの位置づけを行うことを目的としている。

これまでの研究では、「ミニ開発住宅地」における住宅更新について発表し、次いで研究対象地におけるアンケート調査からコミュニケーションの多さを発見した^{文1)}。地区内での不特定多数の人によるコミュニケーションの場として「飲み屋」の研究について報告した^{文2)}。次いで、「公民館」を対象に、公共空間における記名性の高い関わり合いについて、また、「商店」を対象に不特定多数の人との係わり合いについて報告している^{文3)4)}。以上のことから、多種多様なコミュニケーションの場が存在すると考えられる。

2 社会学におけるコミュニティ

マッキーヴァ^{文5)}は『コミュニティ』において、コミュニティは「人間の共同生活が営まれる領域、村でも町でも地方でも国でも町でも場合によってはさらに広い領域でも、そこで生活する人々が他の領域の人々から区別されるような共通の特徴を形成していればコミュニティの名に値する。」とし、コミュニティの発達の要因としては、共同の関心からコミュニティが発達すると述べている。

テンニエス^{文6)}は『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)(下)』の中で、近代化の中で伝統的な村落共同体から新興の都市社会へと、社会構造が変化する過程を問題として、「ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト」とコミュニティ論を述べている。従来のムラ的な地縁関係を「ゲマインシャフト」と呼び、都市における共同生活において2,3軒隣の人を知らず、本質的には分離しているという状況を「ゲゼルシャフト」と呼んでいる。

3 建築におけるコミュニティ論の必要性

建築や人間は単体で存在している。しかし、建築は集合体、人間は共同生活として集合しながら生きている。住宅地において人間は、公共施設や商業施設などを利用しながら共同生活をしている。集合しながら生活することにおいて、建築計画や都市計画における生活する人のための適切な配置計画が必要になってくる。これは、建築の配置計画により、生活する人にとってコミュニティが育まれる可能性があるからである。生活する上でコミュニティは必要であり、人間にとってコミュニティが育まれる空間をつくる必要がある。

コミュニティを生むための環境として建築が必要であり、建築におけるコミュニティ論は必要である。

5 コミュニティ喪失の原因

高度成長期に伴い、都市化や情報化社会になり、人は都市に集中し人口過密の中で生活をするようになった。人口過密の中、高層化した現代都市、プライバシー重視の住宅は、生活領域を住宅内に狭めつつある。従来のムラでは、「地縁」関係などによりコミュニティが気付かれゲマインシャフト的な生活を送っていた。しかし、人口過密の都市ではゲゼルシャフト的な生活を送っている。このような社会性から都市ではコミュニティが喪失したと言われている。

4 現代社会におけるコミュニティの必要性

人間にとってコミュニティとは、社会を形成していく上で必要なものである。例えば災害や防犯の時に、生活空間の中でコミュニティが築かれていれば、助け合いの相互扶助関係が生まれる。現代の事件ではよく報道されることだが、一人暮らしの老人が誰にも気づかれることなく死亡し、何週間・何ヶ月たってから発見される。もし、その場所にコミュニティが築かれていれば最悪の事態は免れたかもしれない。

クライン^{文7)}は、コミュニティの必要性を次の点であげている。

- ・ 生活の空間と非難場所を提供し配布すること、ならびに他のいろいろな目的のために空間利用の決定を行うこと
- ・ 必要な物資とサービスを分配するための手段を利用できるようにすること
- ・ 安全と秩序を維持し、葛藤や紛争の解決を促すこと
- ・ 新しい入来者を教育し、その行動様式を変容させること
- ・ 知識、観念、信念などを伝達すること
- ・ 信念と行動についてのルールや規範をつくり、それを施行すること
- ・ 個人と集団が相互作用を営むための機会を提供すること

高齢化社会を迎え、福祉や防犯、災害対応、認知性などの点からもコミュニティが必要である。

現代社会の中で、どのようにコミュニティを形成すべきか考えなければいけない課題の中で、都市化に伴い生まれた「ミニ開発住宅地において」コミュニティが育まれている要因を解明することで、建築系計画の基礎的知見になればよいと考える。

6 調査方法

日本建築学会で発表されている計画系論文集・計画系論文報告集・技術報告集の中から、日本建築学会論文集・技術報告集検索ページで以下のキーワードで検索し、該当した物の中から関係のある物を選び研究の位置のづけを行った⁸⁾。

(2007年10月1日時点)

- ・ コミュニティ
- ・ コミュニケーション
- ・ 高齢者
- ・ 集会施設

の項目から調査を行った。

その中で研究対象となった論文26本を、関係のある研究ごとにグルーピングを行った。

7 結果

(1) コミュニティについて

高橋^{文9)10)11)}らは、コミュニティ志向の存在と発展の可能性、諸要素を見出し、地域の物的な仕組みに対するものとして、コミュニティの抽象的な構造を捉え、地域における生活行為とそれが発生する空間との関係について述べている。コミュニティの概念的な研究であり、行動主体としての住民の発生について述べているが、建築計画的には述べていない。鎌田¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾は、農村部においてミ

ニ開発住宅地の混住化で分割された行政区について、定住化等住宅地の動向、行政区の運営に関する評価、地域交流の実態、コミュニティ意識、生活環境評価、地域交流の実態、コミュニティ意識、生活環境評価、住環境評価の特徴を明らかにした。

(2) 集会施設・公民館について

高橋^{文15)}らは、地域施設を利用のしやすさ、生活の質の向上、都市の居場所としていくための基礎的知見を考察した。結果から利用目的は、学習目的が多く見られたが、交際目的などのタイプの違いも見られた。利用者の利用圏は都市計画や施設配置において予想された計画単位内だけではないことがわかった。利用者のプライバシーについては、心理的負担感をなくす方法やその場所の積極的な対応が、交流意向の度合いが様々な現代都市コミュニティにふさわしいものになるのではないかと推測している。利用者の施設利用パターンは交流意向パターンと非交流パターンの二つに分類されている。S地区の「公民館」の研究においても施設利用者の行動範囲に関係なく施設を利用されているという結果が出ている。

藍沢^{文16)}は、地域住民の行なう生涯学習活動と、居住地域に立地する地域施設の活動機会提供の状況を対応させることにより、身近な地域の公共施設を担う役割と今後の整備計画を明らかにした。地域において地域施設が必要ということを指摘している。

桜井^{文17)18)}、余暇生活の場面におけるグループ活動の全体像を明らかにし、「予測」として意味あるものへと発展させるための前提条件として、余暇生活の「グループ化」の規定要因を明らかにすることの必要性を示した。また、余暇生活とグループ活動参加動向に対する規定要因を、生活時間および階層的視点から考察している。S地区では、公民館内でのグループ活動におけるコミュニケーションの質に関する研究を行っている。同じグループ活動の研究だが違うものといえる。

桜井^{文19)}は、集会関連施設の実態を「階段構成」と「室構成」という2つの観点から、全国規模で把握し、多様な実態を、「需要構造論」や「施設需要論」の知見と合わせて分析可能なスタイルに類型化を行った。桜井^{文20)}は、公共および民間の市域対象講座を対象に、その講座生のグループ活動の展開過程と施設要求との連関の構造を検討し、そこにみられる差異を明らかにした。

川岸^{文21)22)}らは、近隣空間での余暇活動及び近隣余暇関連施設の実態の分析から、近隣余暇関連施設の施設計画についての基礎的知見を得るこ

とを目的とし、余暇活動の実態を生活空間、活動項目の側面から検討した。その結果、多様な活動実態の中にも、余暇活動の時間的側面からみると、個室空間、家、庭空間が活動を行う空間としての主要な役割は近隣空間が担っていること。また、近隣空間は主として子供、高齢者の空間として機能する割合が高くなってことや、身近で容易に行うことができる日常生活と密接に関係する活動が行われている空間として、機能していることを明らかにした。

(3) 高齢者の外出行動について

森ら^{文23)}は、高齢者が日常的な散歩行動において、散歩行動から地域環境の質的要件を診断するための基礎的フレームを検討した。両角ら^{文24)}は、高齢者にとっての生活領域の空間構成と外出の促進・抑制要因の関係を明らかにした。

高橋ら²⁵⁾は、計画的集合住宅地と高密度既成市街地において高齢者の行動環境を比較した結果、質的に大きな違いが見られた。

外山ら^{文26)}は、転居による居住の移動を中心に外出行動と人的交流の実態を比較した。また、在宅高齢者と施設居住者の地域環境との関わり方、集団の特徴、人的交流を分析し、施設の社会化の必要性を考察した。

(4) 居場所について

高橋ら^{文27)28)}は、都市空間の中の居場所の利用のされ方、行動セッティング、コミュニケーションの質、そして地域の中の位置づけを探ることを通じて、公的空間及び市民の生活に適合した居場所のあり方について考察した。S地区の研究では、「飲み屋」「商店」の研究に近いものである。柏原ら^{文29)}は、多様なコミュニケーションを誘発しうる繁華街の街路空間での、ストリートパフォーマンスの実態を観察やヒアリング調査を通して、パフォーマーにとっての意義を考察した。結果として、繁華街での街路空間において発生する空間の特性およびパフォーマンスの特徴と選択された空間との関係を明らかにした。都市空間におけるコミュニケーションの場所であり居場所である。

舟橋ら^{文30)}は、「中間的な濃度の関係」を視野に入れて、現在の子ども・若者は地域においてどのような社会的関係を築いているのかを考察し、今後の地域環境のあり方を示した。研究の結果から、目的のある場所を訪れたり、通りかかったりすることによって異世代の人と顔を合わせ出会いが生まれているということが得られた。S地区の「商店」の研究においても商店内で、店員と客、客と客、というコミュニケーションが報告されて

いる。買い物という目的の場所で、コミュニケーションが生まれているという結果と類似している。

高橋ら^{文31)}は、団地のオープンスペースの人の分布状況を記述・分析することを試み、場所によって質的・量的な特徴が見られることを示した。団地のどこに人が溜まるのか、団地外では人は移動行動が中心であるなどの居場所の研究である。S地区においてどのような場所に人が溜まるのかを検討するときに必要な資料になると考えられる。

(5) 高齢者の地域との関わりについて

上野ら^{文32)33)34)}は、高齢者が農村部と都市部ではどのように生活や地域社会との関係を築いているかを分析した。その中で「空間(=地)を媒介とする個人とヒト・モノ・場所との関係」を「地縁」と定義し、この「地縁」が実際の高齢者の生活にどのようにあらわれ、どのような意味をもつのかを明らかにした。また、その時間軸における変容や地域性による違いを把握することにより高齢者の生活における「地縁」の構造を明らかにした。S地区での高齢者との地域の関わりについては、S地区では多種多様なコミュニケーション場の多くが高齢者中心の活動の場になっている。S地区で行われている行事の主催も高齢者が中心になって行われている。

(6) 今後の展望としての論文

小滝ら^{文35)36)}は、まちづくり活動の特殊を種々の理念をもとに解いてゆき、それが高齢者の地域社会全体のあり方にどのような影響を与えているかを考察している。S地区においてグループ活動を形成した人が、今後地域において新しい関わり参考になる研究である。

8 まとめ

実験の研究対象論文について、関係のある項目ごとにグルーピングを行い、S地区で報告された研究との位置づけを行った。本研究の位置づけとして以下に示す。

- ① S地区は、都市化の中で生まれた「ミニ開発住宅地」であり、劣悪な住環境においてゲマインシャフト的コミュニティが存在する。その原因を、多種多様なコミュニケーションの場の関係から考察している研究は、過去の他の研究には何れも該当しない。
- ② 「公民館」「商店」「飲み屋」を地域の人にとってのコミュニケーションの場として考察している研究は、過去の他の研究には何れも該当しない。

「参考文献」

- 1) 曾根陽子,松村朋:1960年代のミニ開発住宅地に関する研究一埼玉県川口市S地区の住宅更新について一 日本建築学会技術報告集 第24号 281-284 2006年12月
- 2) 曾根陽子,武田有紀:1960年代のミニ開発住宅地における近隣コミュニケーションに関する研究一その1 飲み屋の利用実態から一 日本建築学会計画系論文集 第608号 11-18 2006年10月
- 3) 曾根陽子ら:1960年代初頭の川口市におけるミニ開発住宅地に関する研究 その1地区と人口の変化 その2近隣商店の実態/その3飲み屋の実態 日本建築学会学術講演概要集 No5764~5766 2005年(近畿)
- 4) 曾根陽子ら:1960年代のミニ開発住宅地に関する研究 その1公民館を利用したグループ活動について その2公民館を利用したグループ活動について その3公民館を利用した「文化祭」について No 2007年九州
- 5) R.M.マッキューヴァ 著,中久朗,松本通晴 訳:コミュニティ ミネルヴァ書房 1975年
- 6) テンニエス 著,杉之原寿一 訳:ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)(下) 岩波文庫,1957年
- 7) 山本和郎:コミュニティ心理学 地域臨床の理論と実践 東京大学出版 1986年
- 8) 日本建築学会論文集・技術報告集検索ページ <http://www.aij.or.jp/scripts/transac/transac.htm>
- 9) 高橋恒,福田成二,伊藤庸一,岩隈利輝:コミュニティ思考の方向性と住民の意識についてコミュニティ計画の基礎的研究一1 日本建築学会論文報告集 第246号 99-108 昭和51年8月
- 10) 高橋恒,福田成二,伊藤庸一,岩隈利輝:地域における人間結合の構造について コミュニティ計画の基礎的研究一2 日本建築学会論文報告集 第247号 135-144 昭和51年9月
- 11) 高橋恒,福田成二,伊藤庸一,岩隈利輝:近隣における生活行為と空間について一コミュニティ計画の基礎的研究一3 日本建築学会論文報告集 第306号 103-114 昭和58年
- 12) 鎌田元広,坂本淳二,細矢健太郎,西村昌彦:混在農村地域における新住民行政区のコミュニティ形成一混住化による再編過程を経た行政区を事例として一日本建築学会計画系論文集 第555号 215-222 2002年5月
- 13) 鎌田元宏:都市近郊地域における混住化集落の類型化とその特性に関する考察一その1 地域交流からみた集落の特性一日本建築学会計画系論文報告集 第382号 P.87 1987年12月
- 14) 鎌田 元宏:都市近郊地域における混住化集落の類型化とその特性に関する考察一その2 コミュニティ形成の視点からみた新旧住民の混在形式の基礎的検討一日本建築学会計画系論文報告集 第393号 61-71 昭和63年11月
- 15) 李乙圭,高橋鷹志,鈴木毅:社会的交流からみた地域施設の利用しやすさに関する考察一東京都の社会教育施設のケーススタディー日本建築学会計画系論文集 第493号 145-152 1997年3月
- 16) 藍沢宏,斎尾直子,川崎佳代子,東條敦子:居住地域における住民の生涯学習活動上と地域施設の活動機会提供に関する研究 日本建築学会計画系論文集 第530号 127-134 2000年4月
- 17) 桜井康宏:余暇生活のグループ化傾向からみた集会関連施設需要の構造一集会関連施設の配置計画に関する研究 その1一日本建築学会計画系論文報告集 第334号 128-138 昭和58年
- 18) 桜井康宏:生活時間と階層的視点からみた余暇性向とグループ活動参加の動向 集会関連施設の設置計画に関する研究 その2一日本建築学会計画系論文報告集 第349号 32-42 昭和60年
- 19) 桜井康宏:集会関連施設の段階構成と室構成一集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その1一日本建築学会計画系論文報告集 第398号 75-85 1989年
- 20) 桜井康宏:余暇生活グループ化の展開過程と施設要求の
- 21) 川岸梅和,北野幸樹:時間的・空間的側面からみた余暇活動の動向と特性について 近隣余暇関連施設に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集 1996年第487号 167-176
- 22) 川岸梅和,北野幸樹:近隣空間における余暇活動の動向と特性について 近隣余暇関連施設に関する研究 その2 日本建築学会計画系論文集 1997年 第498号 153-159
- 23) 森一彦,井上晶子,奥田夏子:二つの異なる地域環境における高齢者の散歩行動の比較分析一既成市街地と新興住宅地におけるケーススタディー日本建築学会計画系論文集 第583号 53-59 2004年9月
- 24) 室永芳久,両角光男:高齢者の生活環境と外出行動の促進・抑制要因に関する研究一熊本市6事例の比較分析に関する考察一日本建築学会計画系論文集 第584号 67-73 2004年10月
- 25) 橋弘志,高橋鷹志:地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究一大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー日本建築学会計画系論文集 第496号 89-95 1997年6月
- 26) 齊藤芳徳,外山義,鈴木浩:居住地域における高齢者の外出行動と人的交流に関する考察 在宅高齢者と施設居住者の比較研究 日本建築学会計画系論文集 第532号 125-132 2000年6月
- 27) 李威儀,鈴木毅,高橋鷹志:台北竜山寺と周辺地域における居方・コミュニケーションの質の考察 都市空間のなかの居場所に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集 NO.468 P.133-141 1995年2月
- 28) 李威儀,鈴木毅,高橋鷹志:台北市興隆公園における社会的コンタクトの考察 都市空間のなかの居場所に関する研究 その2 日本建築学会計画系論文集 第475号 109-117 1995年9月
- 29) 阪田弘一,柏原土郎,吉村英祐,横田隆司:繁華街におけるストリート・パフォーマンスの実態とその発生場所の空間特性一コミュニケーションを誘発する都市空間に関する研究一日本建築学会計画系論文集 第541号 123-130 2001年3月
- 30) 田中康裕,鈴木毅,木多道宏,舟橋國男:地域における子ども・若者にとつての異世代の顔見知りの人との関係一社会的関係からみた地域環境に関する考察一日本建築学会計画系論文集 第595号 65-72 2005年9月
- 31) 花里俊廣,高橋鷹志,石井京子,村井エリ,山田純:集合住宅のスペースにおける人の分布状況とその分析 共居環境の形成に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集 第500号 87-93 1997年10月
- 32) 登張絵夢,竹宮健司,上野淳:農山地域にみる高齢者の生活と地域との関係に関する事例的研究 高齢者の生活における「地縁」に関する試論 日本建築学会計画系論文集 第540号 125-132 2001年2月
- 33) 登張絵夢,竹宮健司,上野淳:都市部における要介護高齢者の生活と地域との関係に関する事例的研究 高齢者の生活における「地縁」に関する試論 その2 日本建築学会計画系論文集 第564号 141-148 2003年2月
- 34) 登張絵夢,竹宮健司,上野淳:農山村地域にみる高齢者の地域生活の構造と変容に関する事例的研究 高齢者の生活における「地縁」に関する試論 その3 日本建築学会計画系論文集 第579号 15-22 2004年5月
- 35) 井上由紀子,大原一興,小滝一正:まちづくり活動への参加と高齢期の地域生活に関する研究 高齢者における地域生活に関する研究 その1 日本建築学会計画系論文集 第547号 103-110 2001年9月
- 36) 井上由紀子,大原一興,小滝一正:まちづくり活動への参加と地域生活の変容に関する研究 高齢期における地域生活に関する研究 その2 日本建築学会計画系論文集 2003年 第565号 121-128
- 37) 金子勇,森岡清志:都市化とコミュニティの社会学 ミネルヴァ書房 2001年